

人文知のフロンティア

⑱ シルクロードの石窟寺院の壁画

クチャの石窟に描かれていた王侯寄進者像。旧ベルリン国立民族学博物館が所蔵していたが第2次世界大戦で焼失。女王(左端)のスカートは、法隆寺献納宝物の染織品と類似の紋様を持つ=檜山特定助教提供



東洋と西洋の文化圏をつなぐ交易路だったシルクロード。誰もがその名を知ってはいるが、その一帯にどのような文化が開花していたか、意外と知らない人が多いのではないかと。今回の研究者は、古代シルクロードの一角にあった仏教国家が残した壁画を読み解いている。遠く離れた時代に、かの地で育まれた豊かな遺産を解説してもらった。

京都大白眉センター特定助教

檜山智美

(美術史)



ひやま・さとみ 1985年茨城県古河市生まれ。ベルリン自由大美術史研究所博士課程修了。博士(美術史)。ベルリン国立アジア美術館研究員などを経て、2018年から現職。京都大人文科学研究所を拠点とし、壁画図像の分析を手掛かりに、シルクロードの仏教石窟寺院の研究に取り組んでいる。

"色彩の洪水"が語る仏教・交易

よって荘厳した石窟寺院は、山体に護られたため比較的よく保存され、20世紀初頭の帝国主義の時代、列強各国の探検隊によって発見されました。荒涼とした砂漠の景色から石窟寺院に一步足を踏み入れると、突如目の前に広がる色彩の洪水に圧倒されます。石窟内の岩の壁面には練り土と白色下地が施され、顔料と有機質の膠着材を混ぜた絵の具によって、天井から床に至るまで色鮮やかな壁画が描かれていました。私はこれらの壁画の図像内容を分析することにより、当時の亀茲の歴史や文化を読み解く研究を行っています。

クチャの石窟寺院の壁画には、仏陀の教えやその生涯と前世をはじめ、因果応報律を説く説話、僧団生活の戒律に関わる話など、莫大な数の物語が描き込まれています。これらの説話図は、人物(僧侶、王族、商人など)、場所(僧院、城塞、海など)、時間、天候などを表す個々の図像を一定の規則に基づいて配置することによって表現されており、亀茲人たちの洗練された画像認識能力を示唆しています。必ずしも識字率が高くなかった時代、これらの壁画は視覚テキストとしての役割を担っていたのでしょう。ひとつひとつの説話図の内容を特定し、さらに壁画の細部表現と一致する経典を割り出すことは、当時の仏教文化の様相を解明する鍵となります。

商人の装いなどといった、仏典には言及されていない細部を描く必要に迫られたはず。このような細部の描写には、しばしば画工たちを取り巻く環境、すなわち当時の亀茲の物質文化が反映されており、当時の習俗やシルクロードの交易状況を復元的に考察するための重要な手掛かりとなります。

壁画を構成する顔料も、貴重な歴史の証人です。クチャの壁画には、シルクロードの交易網によってユーラシア各地から運ばれてきたさまざまな高価な顔料に加え、ふんだんな金箔の使用も見られます。絢爛豪華に荘厳された仏教僧院を寄進することにより、在家信者は徳を積むことができたほか、荘厳の魅力が人々の信心をさらに強化するという側面もありました。壁画の中には、しばしば寺院の寄進者たちの肖像画が描かれています。伽藍の荘厳は、僧団と世俗社会を繋ぐ結び目としての役割を果たしていたのでしょう。

ところで、今もクチャ地方に現存する石窟寺院には、多数の壁画の切り取り痕が残されています。これは20世紀初頭の各国探検隊による調査活動に由来するもので、西域各地の石窟寺院から切り取られた相当数の壁画断片が、列強各国へと輸送されました。2度の世界大戦を巡る混乱に巻き込まれた結果、これらの壁画はさらに第三国へと渡り、今では世界各地の美術館・研究機関に分散しています。帝国主義に翻弄されて世界中に散らばった壁画断片を探し出し、その石窟内における本来の位置を、探検隊の記録と現地状況の対照しながら特定する作業は、いわば「歴史のジグソーパズル」です。

過去の歴史や文化の研究は、すなわち古文書の研究というイメージが強いかもしれませんが、しかし、造形芸術作品も、しばしば文献からは零れ落ちてしまう情報を伝えてくれる重要な史料です。多角的な視点から作品を分析することにより、絵画や彫刻は豊かに語り出します。作品自体が持つ声に耳を傾けることで、当時の人々の暮らしや祈りに触れることができるのが、美術史の魅力です。